

マールブルクと宗教学

宮嶋俊一

木曜日、午前十一時。開店前のガスト・ハウスのレストランはまだ静かである。ドイツによく見られる古い木組の建物、店先にはお日様を象った小さな看板が下がり、そこには「ツァ・ゾンネ(太陽へ)」の文字。狭い入り口を潜った左奥、軋む階段を登り二階に上がる。薄暗い部屋の中には重量感のある木製のテーブルが二つ、その上にはまだ椅子が乗せられたまま。明るい小窓の外から、マルクト広場を歩きかう人々のざわめきが聞こえてくる。窓際にあるテーブルから椅子を下ろしていると、ひとり、またひとりといつもの「仲間」が集まってくる。「仲間」たちと世間話をしながら、準備を進める。そうこうしているうちに、重い体を引きずるようにして「教授」が姿を見せる。「おはよう。」

店員が注文を取りに来ると、僕たちは思い思いの飲み物をオーダーする。「教授」はいつものようにクーゲル・ビールを注文する。中身は普通のビールだが、それが丸い形をしたグラスに入っている。このグラスが「教授」のお気に入りである。僕はいつも、ポット・コーヒーをたのむようになっていた。二時間以上も続くゼミの議論に耐えるには、カップ一杯のコーヒーでは足りない。飲み物が出揃った頃、「教授」ことライナー・フラッシュェは言う。「じゃあ、そろそろ始めるか。」

参加者は大抵5、6人。どの参加者の前にも、取り敢えずその日のテキストがある。しかし、発表者はいない。「どうだったかな？」というフラッシュェの問いかけに誰かが答え始めることで、ゾンネ・ゼミは動き出す。もちろん、参加者はテキストを巡って発言をしていくわけで、発言の裏付けとして常にテキストが参照されていく。「13ページ一番下にはこう書いてあるが、はたしてこういうことが実証できるのだろうか?」「3ページの主張と、5ページの主張の間には矛盾があるので

はないか?」などなど。しかし、いつしか議論は少しずつテキストを離れていく。その時々で議論の主題は様々である。それぞれの参加者の知識と思考が入り乱れ、「声」となって重なり合い始める。こうなってくると、議論に参加するにあたってテキストをどれだけ理解しているかはあまり問題ではない。その場でどれだけ思考が動いているか、どれだけ頭が働いているかの問題だ。ゼミに参加して間もない頃は、参加者たちが何をこんなに一生懸命議論しているのか分からなかった。真っ赤な顔をして、この人はいったい何を訴えているのだろう?だが、いつしかそれが分かってきた。その議論はいつも「宗教学」を巡っていたのである。

私がこのゼミナールに「参加」できるようになるまでには、かなりの時間を要した。私がドイツに赴いたのは三年前、1995年の夏であり、大学に通い始めたのはその年の秋からだだったが、最初の一年間はただひたすら黙って「そこ」に座っていただけのように記憶している。このゼミの参加者の間には、私が「外国人」であるがゆえの「気遣い」などない。初めの頃こそ「わからないことがあれば、質問しろ。」と言ってくれたが、議論が始まってしまえば黙っている私などお構いなしにゼミは進行していく。一年を過ぎた頃であろうか、ゾンネ・ゼミの参加者の一人、カステンは私に問うた。「シュンイチ、お前、ゼミでいつも黙っているけれど、どうしてだ?」「だって、分かんないんだよ、みんなが何を議論しているのか。」「じゃあ、どうして質問しないんだ。」「だって、質問するためには、議論の内容が少しは分かっただけじゃあないか。僕は質問できるほど議論の内容を理解していない。それに、分からないことをいちいち質問していたら、僕はその度に君たちの議論を中断しなければならぬ。これは失礼なことじゃないか。」困ったなあ、という顔をしながら、

カステンはこう言った。「それでも君は、発言すべきだ。君にはゼミの参加者として発言する権利があるんだ。それに、分からないのに分かった振りをして黙って座っている方が、僕たちに対して失礼じゃないか。ここは日本じゃないんだ。」なるほど、と思った。それから僕は、ゼミで最低一回は何か発言することに決めた。初めのうちは頓珍漢なことばかり言っていたと思う。それは、参加者たちの顔を見ていれば分かる。ゼミが終わってからは、やはりゼミの参加者であるフリッツと学食で昼食を取ったが、その時にもその日のゼミでよく分からなかったことを彼に問い質した。彼は嫌な顔一つせず、その日の議論の内容を噛み砕いて説明してくれた。たまに「今日のシュンイチのあの発言は、なかなかポイントを捉えてたよな。」などと言ってくれた。嬉しかった。そんなことを半年ばかり繰り返していた。僕がようやくゾンネ・ゼミに入っていけるような気がしたのは、それからである。

扱われるテキストは学期によって様々であった。ヨアヒム・ヴァッハのテキストを次々と読んでいったこともあれば、人類学の最近の論文を読み進めていたこともある。議論のテーマが明確になり、参加者の間からそのテーマに関する参考文献が挙げれば、「じゃあ、予定を変更して、来週はそっちのテキストを読んでみようか」といったこともしばしばであった。学期の初め、ゾンネ・ゼミには明確なプログラムはない。毎回の議論の積み重ねが、ゼミの主題を少しずつ絞りこみ、それによって方向性が少しずつ明らかになっていく。右往左往し、拡散し、また集中し、その繰り返しである。

みなそれぞれ、思い思いの発言をしながらも、議論はフラッシュェの宗教学モデルを基にして進められていたと思う。だが、「先生のお考えを拝聴いたします」風の雰囲気はまったくない。むしろ、事態は逆である。学生たちはみなフラッシュェに食ってかかる。議論を進めていくための土台が少しずつ顕在化し、共有されてくる一方で、さらにそれを崩そうと学生たちは躍起になる。しかし、フラッシュェもなかなか崩れない。それを崩そう、崩そうとしていくうちに、少しずつではあるが学生たちの間に「自分の考え」が生まれてくる。

急いで付言すれば、マールブルクの宗教学者たちにも様々な潮流がある。歴史学に依拠した堅実な学を目指す人々、社会科学的なアプローチを積極的に導入しようとする人々、宗教学の実践的な役割を強調する人々、オットー・ハイラー流の宗教学そのものには問題を感じつつも彼らの「他者理解」を継承せんとする人々…。そして、そのような立場は「学問的信念」によって形成されると同時に、学内政治的なポジションとも関係しており、一筋縄ではいかない。マールブルクの宗教学は色々な意味で一枚岩ではない。だが、様々な立場をとったマールブルガーたちに共通するのは、宗教学へのこだわりである。毎学期、宗教学基礎論や方法論、学説史に関する講義、ゼミが多数催されることからそれは明らかである。それだけではなく、機会があるごとにそれらの人々が集まって宗教学について議論を闘わせる。そのような議論は一種不毛な営為ともいえよう。結論など出ない、完全な意見の一致などありえない。しかし、そのような議論を飽くことなく積重ねていくことで、みなそれぞれが宗教学という営みのあり方について考えていく。解釈学をテーマにして二人の教官がひとつのゼミを主催することがあったが、この時は学生そっちのけで教官同士が議論をしていたのが印象的だった。また、宗教学研究に関わる多くのスタッフが制度的な枠組みを越えて、世界の諸宗教について講ずる講義もユニークであった。一人の担当がおよそ二回、十人弱の教官がそれぞれ専門とする地域の宗教についての講義を行う。スタッフの層の厚さがこのような企画を成立させていることは言うまでもないが、それに加えてそれらのスタッフ間には様々な意見の相違を越えた宗教学への思い入れが感じられる。

宗教学を巡る議論の中に（キリスト教）神学／宗教学という図式が残されているのもマールブルクらしい。それは、今だプロテスタント神学部が厳然と存在し、宗教学の（諸）インスティテュートが神学部との様々な「距離」を保持していることにも拠るであろう。そのような緊張関係の中で、マールブルクの（諸）宗教学は自己形成を果たしてきた。また、そのような議論は「伝統」に拘束されているとも言える。誤解無きように言えば、

現在のマールブルクの宗教学者たちの中に、オットー・ハイラーらの宗教学を素朴に継承している人々はいない。むしろ、かつての「マールブルク宗教学」に対して、極めて批判的なスタンスで臨んでいる。しかし、ゼミで宗教学の「古典」が取り上げられる機会が多いことは、やはり「伝統」に対して批判的に「向き合う」姿勢を示しているといえるだろう。「伝統」を切り捨てることはないのである。そのような作業によって批判のための批判をしているのではないか、と不満を抱いたこともある。「やっぱり、だめだ」ということを確認するためにわざわざテキストを読んでいるのではないか、と。しかし、それらがなぜ「だめ」なのかについて、今日的な状況の中で改めて自分たちで考えていくという作業は決して不毛なものではなかったと思う。それは、「新しいもの好き」「流行好き」の私（たち）にとって、必要な作業でもあろう。「古いからだめ」なのではない。なぜ「だめ」なのかを、自分たちで考えていくのである。

私はハイラーで修士論文を書き、またハイラーを中心として博士論文を書くつもりで、マールブルクを留学先として選んだ。マールブルクに行けばハイラーに関する史料があるであろう、という軽い気持ちであった。史料を集めるという意味では一種のフィールドワークであったともいえる。しかし、結果的には、それ以外のものを手にしてしまったように思う。「それ以外のもの」とは何なのか、それは今後、私が研究を進めていくうちに少しずつ具体的な形にして示していければいいと思う。ふと私が思うのは日本への留学生たちのことである。東京大学宗教学研究室を留学先として選んだ人たちには、みな、それなりの理由があるだろう。しかし、彼らが「期待していなかったもの」を私（たち）は彼らに与えているだろうか？ 思ってもいなかったことを学ぶ機会が、研究室にはあるだろうか？ 表面的な知識や情報を求めてきた人々に、「それ以外のもの」を持ち帰ってもらっているだろうか？ それらは決して意図的に「与える」ものではない。むしろ「読み取られる」ものである。そんなものを私（たち）は何か持っているだろうか？ また逆に、私はマールブルクで十分に「使われた」と思う。彼らは日本の宗教状況に、

そして日本の宗教学に関心を持っていた。それゆえ、ドイツ語もろくろく話せない私を「使って」（ここでも、「外国人」である私に対する「気遣い」はなかった）、日本に関する発表をゼミや研究会で行わせた。私は、日本の宗教学に関する発表を二回行い、日本のある新宗教についての発表を行い、日本の近代化と世俗化についての発表を行った。それらは付け焼刃的な発表であり、今となっては恥ずかしいばかりだが、マールブルクから「日本」を見つめる作業は私にとっても有意義なものだった。離れているからこそ見えてくるものもあるのだ。そのような場に私を駆り出した彼らは、「お互い違うものを身に付けてきた」ということを前提としていたのだろう。「こいつは、ドイツ語はうまくない。発表を聞いても良く分からない。けれども、日本で何かを学んでいるはずだ。いったいこいつは日本で何を学んできたんだ。こいつはどういう情報を持っているんだ。そもそもこいつは『何処』からやってきたのだ？」そそれは「他者」に対する関心であろう。その関心に対して、私はできる限り応えようとしたつもりである。関心を持たれることに対して悪い気持ちを抱いたことはない。留学生を自分たちの規準で測るのではなく、まず留学生に語らせてみることで、そして分からないことを次々に問い質していくこと、その過程でお互いの接点を探っていくこと、それが彼らのやり方であった。

何か「マールブルク礼賛」風の文章になってしまったが、現在のマールブルクに問題がないわけではない。大学予算の切り詰めによって、今ドイツでは大学制度の改革が進められている。その影響で、宗教学に関わる三つのインスティテュートも統合される方向にあるが、その過程でそれぞれのインスティテュートの「利害」が衝突しあい、先に述べた「立場の違い」は「対立」の様相を呈し始めている。まだ改革の過程にあるため明確なことは言えないが、そのような「対立」が「自由な議論」を疎外する方向に向かわなければいいと心から望んでいる。